

35歳
だった区切りの35歳、原点へ
レゲエ・ミュージシャン

NAHKKI(ナーキ)

ナーキにとっての初めての「外国体験」は、小学3年生の時に行った大阪万博だった。日系大企業のパビリオンが大混雑する中、少年ナーキは海外の名も知らぬ国々のパビリオンを夢中らで回っていた。その頃から彼の目は漠然とながら海外へ向き始め、「医者」「弁護士」の夢が並ぶ卒業文集の「将来の夢」欄には、「カリフォルニアで石焼き芋を売りたい」



中学1年生の時、親友達とのサイクリングの帰りに転倒。右腕骨折を含む大怪我で、夏休み1カ月を寝て過ごすことになる。それを機で歌謡曲やアニメソングを歌うことが大好きだったナーキは、この療養生活中に洋楽と出会う。時は70年代半ばカーペンターズなどのポップス全盛期だった。以来、ロックやソウルを様々な洋楽を聴きまくったナーキは、高校2年生のある日、FMで初めてレゲエという音楽を聴き、親近感を覚えた。その昔、歌謡曲が大好きだったのは、お風呂で歌え

る楽しみがあったからだが、初めて買ったジミー・クリフのアルバムにはそれがあつた。肌の色や人種を越えた平等を歌う歌詞にも共感した。

一橋大学の法学部国際課程に進学したナーキはバンドを組んで、レゲエ・ミュージシャンとしての活動を始めた。都内のライブハウスで演奏したり、音楽雑誌の編集にも関わるナーキの生活は、どんどんレゲエに染まっていく。やがてナーキは情報誌「びあ」に就職する。音楽の現場に身が置ける上に、若い企画力や行動力が必要とされるおもしろい職場だった。

その年、ジャマイカからシュガー・マイノットが初来日し、取材に行ったのをきっかけにナーキは彼と一緒に演奏する機会を得た。ナーキのレゲエを聴いたシュガーは「日本にいるのはいらないから、ジャマイカに来いよ」と誘ってくれた。翌年、23歳のナーキは初めてジャマイカを訪れた。前もって連絡したわけでもないナーキの訪問をシュガーは歓迎し、すぐに一緒に演

奏する機会を作ってくれた。ジャマイカでの初めての演奏が終わった後、ドレッドヘアのラスターのじいさんが涙ながらに僕の手を握りしめた。「お前は神の調子師を知っているから、どうかそのまま続けておくれって言った。この人たちにどうしては単なる音楽じゃない、何かとんでもないことをしてしまっているんだって身震いがした」

「びあ」を退社したナーキは88年アメリカへ。ニューヨークを拠点にジャマイカ、日本と忙しく飛び回った。ジャマイカは貧富の差が激しく、貧しいゲッタト地域は一歩外に出たら何が起るか分からない。「サファリアパーク」みたいな所だという。そんなサファリアパークの住民達と友好を深めたナーキは、途とどうジャマイカに引越す。リゾートには最高の国だが、実際は矛盾だらけの国だった。物事がスムーズに進んだ試しがなく、お金を持っていた人だけがそれを動かす力を持っていた。

ナーキは日本でのソロ・ツアー、レゲエの盛衰を住みながら、アト、レゲエ・ジャパンス・ブラッシュ、ニューヨークのクラブ、ジャマイカでのビッグコンサートなど、活発な活動を続ける。96年にはタイアナ・キングとのコラボレーションで、JALバックのCMソング「アイル・ドウ・イット」を大ヒットさせた。

ジャマイカの一部になりきったナーキだったが、35歳を迎える時に、自分の故郷、自分の原点とも言える名古屋に帰ることを決意することになった。ジャマイカで学ぶことは学んだ。人生の区切りの時、たと思つた。

それから7年後の現在、どこにいてもやれるという確信を得たナーキは、再びニューヨークを拠点に日本の外と中を行きかう生活を送っている。

音楽を通して自らが「人種や肌の色を越えたヒラの人間同士が対等に話さための媒体」になれたらと、ナーキの第2ラウンドがスタートした。敬称略

(文・岡田砂智子)



な一さ

1962年生まれ。愛知県名古屋市出身。一橋大学法学部国際課程卒業。ジャマイカ盤、US盤を含む数多くのシングルに続き、90年「BADDEST JAPANESE」でアルバムデビュー。昨年までに10枚のフル・アルバムをリリース。ダイアム・キングとの大ヒット「I'll Do It」の他にも鹿島アントラーズ・チームソング、NHK「みんなのうた」なども手がける。昨年は名古屋とまつり音楽賞、今年は愛知万博へのエンターと地元を忘れていない。世界に広がったレゲエを通じた出会いを、さらに広げたいと願う。www.nahki.com

1997

35歳だった年の
できごと

- ダイアナ元英皇太子妃、パリで交通事故死
- ベルー日本大使公邸人質事件、127日目に解決
- 神戸児童連続殺傷事件起こる
- 「たまごっち」が大ヒット